# 「海を見に行きたいんだ。ローラースケートで」

# 120km、遙かなる探検部女性2人の冒険

「九十九里の海を見に行きたい」
ふと思い立ってもオカシクない。もちろんクルマか電車に決まっている。ふつうは。
探検部の女性ふたりは違った。「ローラースケート」で向かったのである。
多摩キャンパスから千葉・九十九浜まで、ざっと120キロ。途方もない道のりを。
風はやさしかった。足は痛かった。
ふたりは海を見たのだろうか？　海に溶けこむ夕陽を。

学生記者　津江瞳（文学部2年）十町田梨絵（商学部2年）

## 100M先でもうコケた

10月31日――「03年白門祭」初日。昼前の多摩キャンパスは徐々に、にぎやかな人群れでふくらんでいた。

午前11時。ざわざわしはじめた周りの高揚を縫って、ふたりはCスクエアを出発した。ヘルメット姿、背中には大きなリュックを背負って。

「雨は降らせん！」「もちろん晴れさせるぜ」と、探検部の面々に口をそろえてミエを切った通りの快晴である。天にも祝福された滑り出し……。

だったのだけれど、第3駐車場へ向う小さな橋の下りで、はや一人がコケた。Cスクエアからわずかに100メートル足らず。「もうやめて帰ろうか」と、彼女は思ったそうである。遙かなる九十九里。じつに先が思いやられる……。

ふたりを紹介しよう。

文学部3年の坂本優さんと、経済学部3年の土田薫さん（ともに現4年）。

企画を立てたリーダーが坂本さん、ちなみに転んだのは土田さん――。

「最初はツッチーの転んだ回数とか数えていたんだけど、あまりにかわいそうで数えられなくなりました」「え？そうだったの？でも結局全部で11回コケました」

和気藹々（あいあい）、「ユウちゃん」「ツッチー」と呼び合う仲良しコンビである。

## ユウ&ツッチー　他は尻込み

探検部ではその都度、きちんとした企画書を作製する。今回、坂本さんが出したのは、

タイトル――《ローラースケート企画「海を見にいこう」》。

その下に、

［趣旨］海を見に行きたいんだ。ローラースケートで。

［目的］中大から九十九里浜までローラースケートで目指し、そして海を見る――と元気一杯に書かれている。

参加者を募る企画発表のプレゼンで、坂本さんはローラーを履いてみごとなスピンまで披露したものである。

「全然ウケず、サビかった」と、企画書のすみに小さな書き込みがある。

いや、土田さんのほかにもう一人、参加の手を挙げた君もいたのだ。総政学部1年の関貴和君。「あのプレゼンで、来てくれる君がいて本当によかった」と女性2人は「新入部員の男気」に小躍りしたのだが、直前にカレはよりによって足首をねんざした。ローラースケートで一番負担のかかる肝心要の足首がやられては、リタイヤのやむなし。カレにすれば、かえすがえすも不運、だったか、そのほうがよかった、のか。

## 多摩センターまで1時間

坂本さんは、じつは両親がローラースケートの選手で、小学生のときにローラースケートのフィギュアで東日本1位になる実力の持ち主。その後も富士五湖を1人で一輪車で回ったりといろいろと挑戦をしている。つまり年季の入った経験者。比して、土田さんのほうは、小学生のときに遊びで少しすべったことがある程度。

「1、2回は練習していったのですがかなりきつかったです。もうすこし練習しておけばよかった」

予定は2泊3日の旅。一応人がゆっくり歩いて1時間に4キロ進むことを考えてローラースケートなら5、6キロ進む計算で出発した。

しかし出発してみれば、モノレールではたった10分でいける多摩センターまで1時間かかったそうだ。

やはり、ふたりの進むスピードには違いがあり、坂本さんが土田さんを待つ場面しばしば。

「もうおいてって、ユウちゃん、って思いましたね」

1日目、予定では港区までいくはずがその半分の柴崎どまり。公園でテントを張り、その近くのスーパーで買出しをし、自炊して就寝。探検部だから野宿は手慣れたものだが、ふたりが撮った写真にはテーピングでぐるぐる巻きの足の写真も。

「坂道がきつくてね、特にくだりが。足の指に衝撃がすべてきちゃって。ほんと辛かったです」と坂本さんも言うくらいだから、土田さんは、「足の指だけじゃなく、筋肉痛もひどかったですよ。朝おきてシュラフから出るとき足を持ち上げるようにしないと足が動かなかった」そうだ。上りになるとカニ歩きの要領、狭い歩道は歩行者に気を遣いながら。まあ大変な道中である。「カニ歩きはちょっと恥ずかしかったけれど、通りすぎる車の中から『がんばれよ』と声をかけてくれる女の人もいて、支えられたなぁ」（土田さん）

中大を出発、元気よく

うーん、なんか危っかしい

## 悔しいレインボーブリッジ

2日目（11月1日）は、1日目の埋め合わせをすべく約10時間も走りつづけた。悔しいことに、

「楽しみにしていたレインボーブリッジ・プロムナードの通行時間が11月から午後6時までに切り替わっていて、1日違い、50分遅れで通れなかったんです」

しぶしぶゆりかもめで移動した。ローラースケートで全工程制覇の夢もここでついえ、「ほんと、切なかったなぁ」とため息の2人。

歩道が狭い道路やがたがた道も多く、がんばった割りに距離は伸びず、有明テニスの森にてテント泊。予定では外房・九十九里も目前の千葉・泉公園に到着しているはずが、まだ東京湾のほとり。《2泊3日》は《3泊4日》に変更されたのである。

## 入院中の祖父を心で見舞い…

3日目（2日）、江戸川を越えて千葉県へ。JR蘇我駅（千葉市）にさしかかって、坂本さんは駅前の病院に目をやった。82歳になるおじいさんが入院中だったのだ。何度か見舞にもきた道をいまローラースケートで通る。

11月末に亡くなられたという。「このときは写真も撮らずに。でも近くを走っただけでもよかった。あのあとお見舞いに行って、ローラースケートの話もしたんです」と坂本さんはすこししんみりした口調になった。

4日目（3日）。このときはふたりして明るさいっぱいである。疲れがピークではあったけれど。時間もないことゆえ、蘇我から東金までは電車で移動し、ついに九十九里の片貝海岸へ。簡単なようだが、駅からなお10キロもの距離である。

「膝が笑う」のをこらえて、ついに海辺に到着したのは午後5時ごろ。すでにあたりは暗くなりはじめ、おまけにそぼふる雨。真っ赤な夕日は拝めなかった。

ゴールの片貝海岸は夕暮れ

## 2泊3日改メ3泊4日 片貝海岸、ハマグリ、ドキドキ感

♪いまはもう秋、だれもいない海……に、若いカップルが一組。夕べの砂浜をダッシュして、坂本さんは膝まで海に入りながら、「もっとカッコよくなってやるー!!」と太平洋に向かって叫んだそうである。

「そんなとき、ツッチーはぐたーっとしてたんだからぁ」

「だってクタクタだったんだもん」

海の家が一軒。九十九里といえば、焼きハマグリである。数が少ない大型はやめて中型8個くらい1200円ナリをがつがつ食べたそうだ。「八王子からの壮挙」を聞いて、おじさんたちが刺身やなんかも差し入れしてくれたらしい。

「もう味は忘れちゃった（笑）。やった！という気持ちでいっぱいでした。なによりやり遂げたことで自分に自信がついた。それがうれしかった」と土田さんはひときわの感慨である。

電車でその夜遅くに帰宅。翌朝は全身筋肉痛で大変だったようだ。口をそろえて「体がギシギシしちゃって」と。

あなたにとって、探検とは何ですか？

坂本さん「自分がドキドキできることをやること。人からみてバカっぽく思えることでも、それを一生懸命やっている自分がカッコイイと思うから」

土田さん「人のやっていないことをやること。今回、私はユウちゃんのようにローラースケートに慣れてなくて大変だったけれど」

〝前人未踏〟の長征をバネに、ふたりはいま就活に全力投入中である。

坂本さん（写真右）と土田さんコンビ